



Summer Conference'99

Activity Theory & EduTech

Learning Engineering :

Escl Research Group at Osaka Univ.

Introduction & Tutorial

MMASHMM, Jun

Educational Systems Technology, Graduate School of Human Sciences, Osaka University,

jun@mmgate.hus.osaka-u.ac.jp

※本報告は、SummerConference'99 の冒頭に行われる都合上、初学者の理解に苦しむ部分、および、本カンファレンスの趣旨とは直接あわない部分は、すべてカットしてある。また、同様に、その後に他の参加者によって報告される論文で繰り返し主張されることに関しては省略しているので、いわゆる逐語訳をおこなったものではない。この点は、ご了承いただきたい。

0. おしながき

1. おさらい
2. マルクスの見た「世界」、近代」への挑戦 - 哲学者が泣いて怒るレビュー
3. Y.Engstrom,D.Middleton(1998) Introduction:Studying work as mindful practice. Engstrom,Y. (ed)(1998). Cognition & Communication at work. Cambridge University Press.
4. Y.Engstrom and R.Miettinen(1999) Introduction. Engstrom,Y.(ed)(1999) Perspectives on Activity Theory (Learning in Doing Social,Cognitive and Computational Perspectives) Cambridge University Press.
5. それで何を「見る」のか？
6. 活動理論の諸問題

1. おさらい

■Reference

Engstrom, Y (1987) Learning by Expanding. An Activity Theoretical Approach to Development Research. Cambridge University Press.

Engstrom, Y. (1995). Developmental studies of work as a test bench of activity theory : The case of primary care medical practice. In Lava, J. & Chaiclin, S (ed) 1995. Understanding Practice. Cambridge Univ. Press. 【

■OverView

1. 人間の振るまいにとって、もっとも重要な分析単位は、対象志向的でアーティファクトに媒介された集団的活動システムである。

1.1. 活動システムは、それぞれ歴史を有するいくつかのコンポーネント（構成要素）から構成される。

2. 歴史的に発展する「内的矛盾」が、たとえば、構成要素間の矛盾が、活動システムの運動と変化と発展にとっての主要な変化である。

→活動システムとは、それを定義づけるならば、多声的な形成体である。拡張的サイクルは、そうした複数の声、すなわち、様々な参加者たちの異なった観点やアプローチを再交響化することである。

3. 拡張的な学習は、行為者たちが自らの活動システムの中で、発達の転換を生み出そうとする努力の中から生まれ、そのようにして、行為者たちは、集団的な最近接発達領域を越えていく。

→矛盾や葛藤の中に、逆説的に生み出される「移行的で拡張的で、予期することのできない性格」を、「新たな活動への拡張」に転換していく実践者の「結び糸細工 (knotwork)」こそが、「拡張による学習」である。

4. DWR (Developmental Work Research) は、介入者のための方法論である。それは、特定の場所での活動システムにおける拡張的学習のサイクルを前進させ、媒介し、記録し、分析することをめざす。

→人々の社会的実践、仕事の現場や組織の歴史的矛盾を分析し、新たな集合的活動システムをデザインし、実践していくための介入方法論である。

→実践者が自身の活動システムを分析し、デザインし直すことを支援するような介入の方法論である。

5. 学習活動 (Learning Activity) とは、活動システムの中に潜在している内的矛

盾を露呈しているいくつかの行為の中から、客観的かつ文化歴史的に、社会的な新しい活動の構造（新しい対象・新しい道具）を生産することである。

2. マルクスの見た「世界」、「近代」への挑戦 - 哲学者が泣いて怒るレビュー

【近代以前】

- ☐人間とは「神の模造物」である
- ☐人間とは「羽のない二足獣」である

【近代：デカルトの欲望】

- ☐人間とは「理性的動物」である
- ☐人間とは「自由意志の主体」である

・・・「近代」という時代は、人間の「理性」と「意志」をことさら価値づける時代であった。そして、マルクスは、この「理性」と「意志」に対して、完全に異を唱えるのではなく、「理性」と「意志」以前に問題になるものを中心に彼の人間観をつくりあげた。

【マルクス】

- ☐人間とは「生産活動」を行う動物である
 - 人間とは、生産手段を生産することで、間接的に物質的生活そのものを生産する
 - 人間の生産活動は「目的論的」である
 - 生産は、人工物を祖先から伝承し、またその使用法を伝承することをもって行われる。また、分業や協働の関係の諸関係も、歴史的・文化的に形成される
 - 人間の生を社会的・歴史的・文化的に考察する必要がある
- ☐人間とは「社会」に内存在する動物である
 - 「社会」とは「諸個人が相互にかかわりあう諸関係、諸関連」の総体である
 - 「社会唯名論、個人実体論」ではない
 - 「社会有機体論」でもない。
 - 「人間は、社会的動物である。単に社会的な動物というだけにとどまらず、社会の「内」においてのみ個別化することのできる動物である」

3. Y.Engstrom & D.Middleton(1998) Introduction:Studying work as mindful practice. Engstrom,Y. (ed)(1998). Cognition & Communication at work. Cambridge University Press.

■Preface

実践とコミュニケーションは、ワークの状況に埋め込まれたものとして、また、多様なワークの状況における実践のコミュニティの再生産の文脈において、理解される。この中には、例えば、ヘルスケアや、法廷、コンピュータソフトウェアのデザイン、科学の研究室、航空パイロット、地下鉄のトラフィックコントロールなどの仕事が含まれる。

■Sociology of Work

□社会学におけるワーク研究の二つの伝統

1. マクロレベルの議論 - 組織論...

2. ミクロレベルの議論 - 局所的に構築され、相互交渉されるワーク

→シカゴ学派は、仕事を局所的に構築され、相互交渉される活動としてアプローチを行った。その流れは、G.H.Mead の影響を受けたエスノグラフィーに引き継がれ、はてには、Garfinkel を代表とする MicroSociological な研究、Ethnomethodology, CA への先鞭をつけた。

→しかし、ここにおいて見落とされた重要な事柄がある。それは、日常的な行為の中に埋め込まれたHuman Agencyの問題と、人々が様々な組織における立場と状況のもとで、仕事をしているという二つの事実である。

□ミクロ社会学とマクロ社会学

→ミクロ社会学のアプローチでは、マクロ社会学とは逆に、仕事のコンテキストや構造は、局所的な相互交渉の結果物として認識されている。しかしながら、マクロ社会学では語られるのに、ミクロ社会学において決定的に不在になるのは、「歴史」である。

→「Agency-Driven Microsociology without History」と「Historically-Relevant MacroSociology Without Agency」の相克

■Rejoining Agency and History

■Practice

「実践的であれ」は、いまや哲学、社会学、心理学のスローガン化しているが、「実践」を直裁に扱うためには、新しい概念枠組みが必要になる。そのためには、まず基本的な二分法、たとえば「主体と客体」、「自然と社会」などを問い直す必要がある。

■Mindfulness

人間の「認知」とは、個人と他者のあいだで、あるいは、個人と人工物のあいだに分かちもたれているものとして理解可能である。認知活動とは、人工物と表象メディアの操作

を総合したものであり、それは社会的に認めれた意味を構築する中で行われる。ワークにおける活動とは、畢竟、コミュニケーションなプロセスである。

■Artifact

コミュニケーション行為と道具の二分法は、意味をなさない。ワークの実践は、テクノロジーによる人工物に媒介されている。人工物といっても、国家のシステムや特殊な語彙からマシンや建物に至るまで多様である。その多くは、人を賢くする可能性をもっているものの、それを保証するわけではない。

■Expertise

認知主義者は、Expertise や Skill を、「よく定義された問題を個人が習熟すること」ととらえていたが、そうした見方はいまや、「Expertise」を「常に進行しつつある、協同的に、かつ、議論を通して仕事やソリューションや、ブレイクダウンや革新を構築すること」ととらえる見方に圧倒されている。

■Continuity and Change

■Data Sources

多くのワーク研究は、主要なデータとしてワークの実践における会話を、主要なデーターとしている。これらの対話の断片は、ある組織の場だとか、ワークの流れ(Flow of Work)だとかに埋め込まれているものである。研究の中には、ワーク実践の本質が、局所的な危機に対する永続的な問題解決であることを指摘するために、ディレンマを抱えて矛盾に満ちたワークにおける会話に焦点を当てているものもある。中には、ワーク実践の「Multivoicedness(多声性)」を体系的な比較を用いて明らかにしているものもある。異なった役割や立場にあるワーカー同士、あるいは、初心者とエキスパート、あるいは、二つの工場や、二つの異なった文化などが、分析的に比較されている。

■ Modalities in Presentation

☐ 会話を補完する Visual Data (Visual Representation) の利用について

■ Doing Work and Research

■ Setting

4. Y.Engstrom & R.Miettinen(1999) Introduction. Engstrom,Y.(ed)(1999) Perspectives on Activity Theory (Learning in Doing Social,Cognitive and Computational Perspectives) Cambridge University Press.

■Preface

□活動理論は、ヴィゴツキーやルリアに代表されるロシア心理学の系譜、文化・歴史学派に端を発している。

□いまや、活動理論は、学習と教授の場面(Moll,1990)や、HCI(Nardi,1996)など様々な領域でインパクトをあたえているが、当初は遊びや学習や子どもの発達などのフィールド研究からはじまり、次第に言語発達や教育機関の改善に領域が拡張され、果てにはコンピュータテクノロジーやセラピーの現場まで広がってきた。

■Philosophical Sources and Discussion Partners of Activity Theory

□活動理論の哲学的根拠はマルクスによっている。マルクスこそ、活動を理論・概念化した最初の哲学者であった。

1. Human Agency を無視する機械論的な物質主義と、理想主義の否定
→両者が見落としていたのは、主観的な主体と客観的な社会環境の二分法を打破するような、「活動」という概念そのものであった。
2. 「活動」という概念によって、「Change(変容)」をとらえた
3. マルクスの労働と使用価値の概念は、人間が目的意識的に活動することを主張した。

→ Vygostky に代表される文化・歴史アプローチは、人間の活動が、文化的な道具と記号に媒介された Object-Oriented Action(対象志向的な行為)であることを主張した。

→レオンチェフは、人間の行為と集団の活動を区別する概念として、「Division of Labor 分業)」という概念を主張した。

4. 人間性は、人間の個体の中に現れるわけではなく、人工物の使用と人工物の創造の世界の中に、つまり、個体外と個体内の中にあらわれる。
5. マルクスは、資本主義社会における使用価値と交換価値の矛盾から、労働の阻害がおこることを主張したが、この弁証法(Dialect)的な概念は、活動理論の分析につよい影響を与えている。

□ Dewey や G.H.Mead らに代表されるプラグマティズムの理論も、活動理論と多くを共有している。

→特に、思考と活動、実践と理論、現実と価値などのDualism (二分法)を乗り越えるという理論的志向に共通点が多い。

→ Dewey の思想には、文化的媒介というアイデアはないが、その理論的支柱は、活動理論と並行する。

→ G.H.Mead の系譜を受け継ぐシンボリック相互作用論者たちは、活動理論と理論的に近似している。何人かのシンボリック相互作用論者は、活動理論的な単位分析法を用いて、異なった二つの社会システムが「出会ったとき」に、どんな出来事が起こるかを考察している。

→彼らは、Boundary Object、Boundary Crossing などの概念を発展させた。

孤立したひとつの活動システムを研究対象とするのではなく、多様な対話に導かれる文化混淆の活動を内包するネットワークシステムを分析する。

- ディスコースや実践を考える上で、後期ヴィトゲンシュタインも参考になる。
 - 後期ヴィトゲンシュタインによれば、コトバの意味や概念は、ある特定のルールをもった、ある特定の言語ゲームの中からのみ、理解されうる。
 - 行為の意味や発話の意味は、生活の形式の一部として理解されうる。
 - 近年の活動理論においては、ミハイル・バフチンなどの「対話の理論」などとの統合がはかられている。

■ The Current Relevance of Activity Theory

- 状況論や分散認知理論に代表される認知科学や心理学における文脈的、かつ文化的理論【文化なるものへの着目】
- 社会学やテクノサイエンスにおける実践志向的な認知の研究
- 活動理論は、対象志向的で、集合的で、文化に媒介された人間の活動や活動システムを分析するための方法論である。
 - 活動システムの最小の構成要素は、主体・対象・道具・ルール・コミュニティ・分業である。
 - 必然的にあらわれる活動システム内の内的矛盾が、活動システムの変容と発展の原動力になる。
- 活動システムの分析者は、二つの「目」をもつ。一方は、俯瞰的にシステムを眺める目、もう一方は、自ら「主体」となって局所的な活動システムを構成するような立場における「目」。
 - システマティックなビューと、主観的なビュー、この二つの目の弁証法的な関係によって、研究者は、ローカルな活動と対話的にかかわることができる。

5. それで何を「見る」のか？

(当日のお楽しみ)

6. 活動理論の諸問題

6.1. Decontextualized Methodology

・・・エンゲストロームの活動分析が、介入者、すなわち研究者が必ずや守らなければな

らない「一定の手続き」として把握され、そうであるが故に、その「方法論」が脱文脈的に、いかなるフィールドに対しても、適用可能なもののごとくに扱われることに対する批判。さらにいうならば、この方法論を採用した際に生み出される知見の、利用可能性について、それがもし、脱文脈的に利用可能ならば、「(あるフィールドに固有の) 文脈を再検討する」という活動理論の当初の目的は、論理的に破綻する。

6.2. なぜ、あなたに見えるのか、あなたは神であったか？

「介入者」、すなわち、「研究者」自身に対する批判。

第一に、活動理論は、介入者、研究者を、「神」のように「高見」からフィールドを観察する存在として扱うが、たとえば、現場の人々に「さえ」見えていない(Invisible)事柄を、なぜ、介入者、すなわち研究者が「visible なもの」として把握できるのか？、否、仮にそれができたとして、現場の人々にとっては「Invisible」な「研究者にとって visible なもの」を価値あるものとして、押しつけることができるのか？この「可視性」に対する非対称性が、結局、研究者と実践者の関係の非対称、すなわち支配 - 被支配の関係をつくりあげるのではないかという疑問が当然でてくる。

さらに、介入者や研究者自身も、アイデンティティをもち、いずれかの所属する共同体に所属しているのにもかかわらず、そこに内在する権力関係や偏見や支配関係は、あたかもないかのように扱われる。そして、さらにいうならば、介入者や研究者が、「聖性」を付与された「神」として扱われるが故に、介入者や研究者の「変容」や「学習」は小さい問題にならない。

(cf. xDEE のメーリングリストを参考に)